

宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2009年度

宇陀市文化財調査概要 6

2011

宇陀市教育委員会

宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2009年度

宇陀市文化財調査概要 6

2011

宇陀市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成21（2009）年度に宇陀市教育委員会が国庫補助事業・県費補助事業として実施した「宇陀市内遺跡」の発掘調査概要報告書（宇陀市文化財調査概要 6）である。
- 2 発掘調査（現地作業及び整理作業）は、平成21（2009）年4月8日に着手し、平成22（2010）年3月31日に終了した。なお、本書の刊行は、平成22（2010）年度事業として実施したものである。
- 3 現地調査は、奈良県教育委員会及び奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと、宇陀市教育委員会文化財保存課 課長補佐 柳澤一宏が担当した。
- 4 調査組織及び関係者は、「I 埋蔵文化財発掘調査の概要」に掲載している。
- 5 測量図及び遺構図の方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いている。なお、平成14年4月1日施行の測量法改正により、測量の基準が日本測地系から世界測地系になっているが、本書では、これまでの遺跡測量成果等の都合上、日本測地系によっている。
- 6 土層の色調は、「新版標準土色帖」2000年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 （財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
- 7 各遺跡の調査記録、出土遺物等は、宇陀市教育委員会において保管している。
- 8 本書の執筆・編集は柳澤が行った。

目 次

| | |
|-----------------------|---|
| I 埋蔵文化財発掘調査の概要 | 1 |
| 1 埋蔵文化財発掘調査等の概要 | |
| 2 調査組織等 | |
| II 位置と環境 | 4 |
| 1 地理的環境 | |
| 2 歴史的環境 | |
| III 下城・馬場遺跡第11次発掘調査概要 | 7 |
| 1 調査の契機と経過 | |
| 2 位置と環境 | |
| 3 遺跡の調査 | |
| 4 まとめ | |
| 5 抄録 | |

図 版
報 告 書 抄 錄

I 埋蔵文化財発掘調査の概要

1 埋蔵文化財発掘調査等の概要

宇陀市（旧大宇陀町・旧榛原町・旧菟田野町・旧室生村）内では、1960年代以降、土木工事等の開発行為に伴い、生活環境をはじめ、地理的環境・歴史的環境も大きく変化してきている。土木工事等の開発行為の増加とともに埋蔵文化財の発掘調査も市内各所で行われ、周辺の山野とともに大きく景観を変え、その姿を消している。

このような状況のもと、榛原町教育委員会（当時）と大宇陀町教育委員会（当時）では、町内遺跡の詳細分布調査を実施し、「遺跡分布地図」の整備をはかってきたところである。2006年1月に大宇陀町・榛原町・菟田野町・室生村が合併して「宇陀市」が誕生し、従来の業務等を引き続いて行っているが、遺跡分布調査が不十分な地域もあることから、基礎資料の再整備が必要となってきている。今後も市内各所で開発行為が計画・実施されており、埋蔵文化財の取り扱い等については、「遺跡分布地図」をもとに事業者等とその都度、協議を重ねているところである。

2009（平成21）年度に宇陀市教育委員会が取り扱った埋蔵文化財発掘届・通知・発掘調査等の件数は表1のとおりである。また、2009（平成21）年度に実施した発掘調査・工事立会は表2・図1のとおりである。本書には、国庫補助事業・県費補助事業として実施した下城・馬場遺跡（11次調査）の発掘調査概要を収録している。なお、下城・馬場遺跡については、発掘調査中のため、調査成果が整理途上にあり、本書にはその一部を登載しているにすぎない。

表1 2009（平成21）年度発掘届・発掘調査件数等一覧表

| 遺跡有無確認調査類 | 埋蔵文化財発掘届 (民間) | 埋蔵文化財発掘通知 (公共) | 埋蔵文化財発掘届・ 通知合計 | 発掘調査 (宇陀市担当) | 工事立会 (宇陀市担当) | 調査件数合計 |
|-----------|------------------|-------------------|-------------------|-----------------|-----------------|--------|
| 0 | 8 | 2 | 10 | 3 | 10 | 13 |

| 摘要 種別 | 文書年月日 | 遺跡名 | 所在地 | 調査原因 | 事業主体 | 工事面積 (m ²) | 措置等 |
|----------------------|-----------------|-------------------|---------------------------------|------------------|--------------------|---------------------------|---------------------|
| 埋蔵文化財 発掘届 (民間) | 平成21年 5月20日 | 宇陀松山城下町 | 大字宇陀区治生 906番1 | 携帯電話用 基地局建設工事 | ㈱エヌ・ティ・ティ ドコモ関西 | 66.22 | 2009年7月 宇陀市工事立会 |
| | 平成21年 5月26日 | サンジョーポ 遺跡 | 菟田野区古市場459-1, 489-1,松原1-1,61 | 社会福祉施設 建設工事 | ㈱クローバー | 5,092.89 | 2009年12月 宇陀市工事立会 |
| | 平成21年 5月29日 | 宇陀松山城下町 | 大字宇陀区西山 95-1 | 個人住宅 建設工事 | 杉本仁美 | 225.28 | 2009年6月 宇陀市工事立会 |
| | 平成21年 7月6日 | 宇陀松山城下町 | 大字宇陀区出新 1826-1 | 個人住宅 建設工事 | 長井成好 | 297.61 | 2009年7月 宇陀市工事立会 |
| | 平成21年 7月30日 | 宇陀松山城下町 | 大字宇陀区下本 2197 | 個人住宅 建設工事 | 松尾一男 | 261.87 | 2009年9月 宇陀市工事立会 |
| | 平成21年 8月24日 | 宇陀松山城下町 | 大字宇陀区春日287-1, 286-1,325-2 | 倉庫建設工事 | ㈱クスダ | 983 | 2009年11月 宇陀市工事立会 |
| | 平成21年 9月15日 | 室生寺 | 室生区室生 1339-6 | 照明ポール 設置工事 | 室生寺管長 | 6 | 2009年11月 宇陀市工事立会 |
| | 平成21年 12月25日 | 宇陀松山城下町 | 大字宇陀区治生669 | 携帯電話用 基地局建設工事 | イー・モバイル㈱ | 9.46 | 2010年3月 宇陀市工事立会 |
| | 平成21年 9月15日 | 鳥見山中腹遺跡、 岩尾火葬墓 | 榛原区萩原 | 道路建設工事 | 宇陀市長 | 3,620 | 2009年12月 宇陀市発掘調査 |
| | 平成21年 11月16日 | 宇陀松山城下町 | 大字宇陀区春日293-3, 下茶2153-2 | 河川改修工事 | 宇陀土木 事務所長 | 400 | 奈良県工事立会 |

表2 2009(平成21)年度発掘調査等一覧表



宇陀市位置図

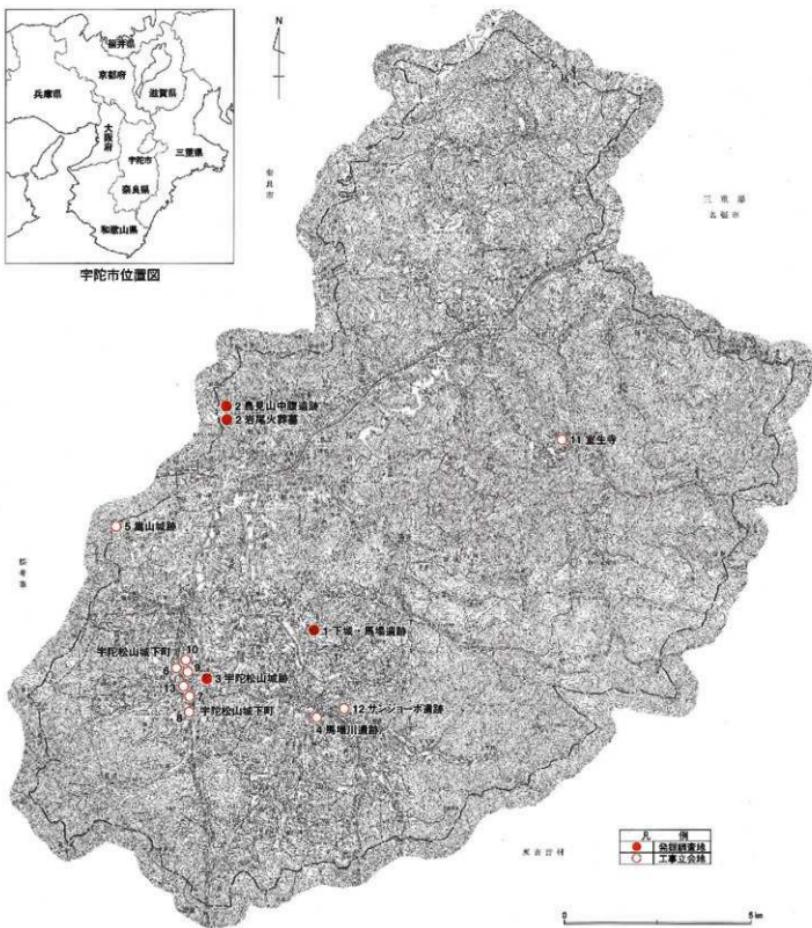


図1 2009(平成21)年度調査遺跡位置図

2 調査組織等

2009年度の現地調査及び2010年度の整理作業等の関係者は、次のとおりである（敬称略）。

2009年度（現地調査）

事業主体 宇陀市教育委員会

総括 教育長 喜多俊幸

庶務 事務局長 穴田宗宏

参考事 吉村泰和（10月1日～）

次長 吉村泰和（～9月30日）

人権生涯学習課（～6月30日）

課長 中出隆三

主幹 山口悦子

調査 課長補佐 柳澤一宏

文化財保存課（7月1日～）

課長 尾上清重

調査 課長補佐 柳澤一宏

2010年度（整理作業等）

事業主体 宇陀市教育委員会

総括 教育長 喜多俊幸

庶務 事務局長 吉村泰和（～12月31日）、小室茂夫（1月1日～）

参考事 小室茂夫（～12月31日）

文化財保存課

課長 尾上清重

整理 課長補佐 柳澤一宏

下城・馬場遺跡（11次調査）

補助員 横山寿美、寺本恵子、芝井祐子、尾井靖子、中山俊恵、前尾真智子、大西幸子、
谷 悅一、田中正男、辻本里美、日野原祥子、筒井郁子、松浪智美、太田保美、
増田恵美子、増田啓

指導・助言 奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所

協力 砥出嘉信、沢自治会、㈱文化財サービス

II 位置と環境

1 地理的環境

奈良盆地東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、宇陀市（大字陀区、株原区、菟田野区、室生区）、曾爾村、御杖村からなる。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」と総称され、宇陀市の西半がこの口宇陀に含まれている。

口宇陀は標高300～400mの丘陵とこの間に縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や深い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称されている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。

宇陀郡の四周はほとんどが山に囲まれており、東が三重県へと続く高見山地、西が大和盆地と宇陀とを区切る音羽山、龍門岳などが連なる龍門山地となっている。南は吉野と接し、関戸峠を越えると紀伊半島を東西に走る中央構造帯を流れる吉野川流域へと至る。北は五条から桜井、株原を経て伊賀へと続く近江・伊賀大断層と呼ばれる構造谷が認められる。この構造谷の北側は急傾斜の断層崖となっており、大和高原とを区切る額井岳（通称 大和富士）、香醉山、貝ヶ平山、鳥見山などの山々が屏風状に形成され、宇陀の地を見下ろしている。

口宇陀を流れる主要河川は、西から順に宇陀川、芳野川、内牧川があり、これらは小盆地、谷部を蛇行しながら他の小支流をあわせ、宇陀市株原区でさらに広い宇陀川となる。その後、宇陀川は室生川をあわせて北東へと流れ、三重県へと至って名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へとそいでいる。口宇陀の西には龍門山地が横たわるため、これが奈良盆地との分水界となっており、大和川流域とは水系を異にしている。この宇陀川の本流は大字陀区宮奥の谷に発し、黒木川、本郷川、中山川などの小支流をあわせて、株原区へと至っている。一方、関戸峠を越えた大字陀区大蔵、栗野などの地区は吉野川の支流である津風呂川の上流域となっている。芳野川は菟田野区岩端を源とし、宇太水分神社の南を流れ、株原区下井足で宇陀川と合流する。芳野川流域と吉野川流域との分水界は、現在も市村界でもある佐倉峠の山系となっている。また、宇陀川と芳野川との間には吉野の山塊から延びてくる標高320～430mの丘陵が横たわり、これらの尾根稜線を境として、現在の大字陀区と株原区、菟田野区との行政区画としている。

これらの地形に沿って古くから様々な交通路が発達し、宇陀地方は大和と伊賀、伊勢そして東国とを結ぶ重要な役割を果たしている。現在の主要交通路は、近江・伊賀大断層沿いの桜井市朝倉、初瀬、株原区萩原、山辺三、室生区大野を通る国道165号線や近鉄大阪線となっており、かつては、伊勢街道（初瀬街道）、青越道などと呼ばれた道である。現在、株原区の市街地が行政・交通の中心的な役割を担っているが、この様相は鉄道が開通した近代以降のことであり、近世以前にはいくつもの道が宇陀を縦横に走り、それぞれが重要な位置を占めていた。

奈良盆地と宇陀とを結ぶ道は、北から西峠、女寄峠、半坂の大峠、上宮奥の大峠を越えるルートが知られており、桜井市忍坂、栗原の谷部を経て小峠を越える半坂越が中心的な役割を果たした。西峠越が国道165号線、女寄峠越が国道166号線となって現在も主要道としての役割を担っている。また、口宇陀を縦断するかのように南北にいくつもの主要道が走り、北へとすると株原を通る伊勢街道を横断

し、香醉峠を経て奈良市都祁町などが位置する大和高原へと至る。南の関戸峠や佐倉峠を越えると、もうひとつ伊勢街道（高見越）へと通じ、関戸峠を越えた三茶屋から南は東熊野街道にもつながる。東への道は青越道のほかに、石割峠を越える伊勢本街道、現在は国道369号線となっている開路（石楠花）・梅坂峠を越えるルートなどがある。

口宇陀には縦横、東西南北の各方面に触手のように道がのび、「壬申の乱」の際、大海人皇子の一行が吉野から宇陀を経て、伊賀へと進んでいったことからも明らかのように、この地域は交通の要衝とし重要な位置を占めている。これらの古代からの道は、国道、県道、町道等に姿を変えているものの、今もその占める役割は変わらない。

2 歴史的環境

宇陀地方、なかでも口宇陀地域には縄文時代以降、各所で多くの人々が生活を行い、その痕跡が「遺跡」となって、今の我々に、様々なことを教えてくれる。また、宇陀地方は、「古事記」、「日本書紀」をはじめとする多くの文献にも度々登場し、今に伝える地名、伝承等も多い。

これまでに、宇陀地域では4点の有尖頭器が出土しており、うち、3点が篠原区内から出土している。これらは、縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀地域の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これらの遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡や坊ノ浦遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は、沢遺跡、下城・馬場遺跡、大貝ヒジキ山遺跡、上井足北出遺跡をはじめとする数遺跡が知られているにすぎないが、後期の遺跡は比較的多く認められる。これらは、地理的制約のためか奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。この時期の遺跡の特徴として、堅穴式住居跡等を設ける低丘陵上遺跡の出現をあげることができ、能峠北山遺跡、平尾東遺跡、五津・西久保山遺跡、五津・峰畑遺跡、大王山遺跡、福地城遺跡などでは、後期から古墳時代初頭に属する住居跡が確認されている。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である台状墓（区画墓）は、これまでに黒木西城跡、胎谷古墳、蓮華山遺跡、見田・大沢古墳群、野山遺跡群、大王山遺跡、下井足遺跡群、能峠遺跡群、平尾東古墳群、西久保山遺跡、キトラ遺跡などで確認されている。弥生時代後期の集落としては、高塚遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、古墳時代の集落としては、先の遺跡の他、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、谷遺跡、石榴垣内遺跡、坊ノ浦遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や堅穴住居跡などが確認されている。

また、文献資料からではあるが、銅鐸の出土が確認されている。『統日本紀』元明天皇和銅六年（713）秋七月丁卯の条に「大倭国宇太郡波坂郷人大初位上村君東人得銅鐸於長岡野地而献之 高三尺 口径一尺 其制異常 音協律呂 勅所司藏之」と記され、この出土地については、詳細は明らかでないが、篠原区八瀧の長坂とも大宇陀区小和田字岡田ともいわれている。

古墳時代前期から中期の古墳は、鴨池古墳、北原西古墳、北原古墳、谷畑古墳、古市場古宮谷1号

墳、シメン坂1号墳、高山1号墳、前山1号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、口宇陀地域の尾根上には数基から十数基単位で分布している。5世紀中葉から後葉に出現てくる古墳群は、後出古墳群、野山古墳群、大王山・篠塚古墳群などがある。その後、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室墳が築造されるようになり、6世紀第2四半期の谷脇古墳を先駆けとして、丹切古墳群、能峰古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室にかわる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した將軍のひとりで渡来系氏族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。このほか、凝灰岩製外容器内から銅製骨蔵器が出土した拾生火葬墓、2枚の鉄板と木炭に包まれた須恵器が出土した岩尾火葬墓がある。

寺院では「女人高野」の別名がある室生寺が知られているところである。古代寺院跡では、安楽寺跡（駒場廃寺）の全容が明らかとなっている。金堂跡と考えられる礎石建物遺構とその東側にも礎石建物跡や素掘溝などが検出され、奈良時代初頭に創建、平安時代中頃に焼失したことが明らかとなっている。この他、小附廃寺、小附大谷廃寺、サンジョーポ遺跡からも瓦が出土している。

古代末には、宇陀においても莊園の開発が急速に進み、坊ノ浦遺跡や高井遺跡では、掘立柱建物跡や素掘溝などを確認している。この頃から台頭してくる地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が發展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・澤氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城、澤城、芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峰遺跡群、八咫鳥遺跡群、野山遺跡群などが発掘調査により明らかにされている。

宇陀松山城（秋山城）跡は、中世から近世初頭にかけての宇陀地方の中核的な城郭と城下のあり方を知る上で欠くことのできないもので、その眼下には城下町が広がる。松山伝統的建造物群保存地区と呼称するこの地区は、近世城下における商家町から在郷町として发展し、近世から昭和前期までに建てられた意匠的に優れた町屋をはじめ土蔵や寺社などの建築群、石垣や水路などが一体となって歴史的景観を今日によく伝えている。

参考文献

- 『宇陀・丹切古墳群』奈良県教育委員会 1975
- 『大王山遺跡』株原町教育委員会 1977
- 『能峰遺跡群』I 奈良県教育委員会 1986
- 『野山遺跡群』I 奈良県教育委員会 1988
- 『高田塙内古墳群』奈良県教育委員会 1991
- 『大和宇陀地域における古墳の研究』宇陀古墳文化研究会 1993
- 『宇陀松山城（秋山城）跡』大宇陀町教育委員会 2002
- 『大宇陀・松山一松山・神戸地区伝統的建造物群保存対策調査報告書—』大宇陀町教育委員会 2001

III 下城・馬場遺跡第11次発掘調査概要

1 調査の契機と経過

下城・馬場遺跡は、澤城跡から南方へ派生する尾根筋とその間を流れる小支流によって形成された小規模な谷地形の先端部の一角を占めている。古くから澤城の下城といわれ、現在も小字名に「下城」や「馬場」などといった呼称が残っている（図2）。

1984年度には「沢集落センター」建設に伴う発掘調査（1次調査）を行い、繩文時代～弥生時代、中世（12世紀～13世紀）の遺構・遺物を検出している。その後、遺跡高所の平坦面において個人による土地改良工事が計画されたため、1993年度に2次調査、1994年度に3次調査、1997年度に4次調査を実施し、15世紀～16世紀の礎石建物等の遺構をはじめ、多くの遺物を検出し、中世の館跡の一端を明らかにできた（図3）。

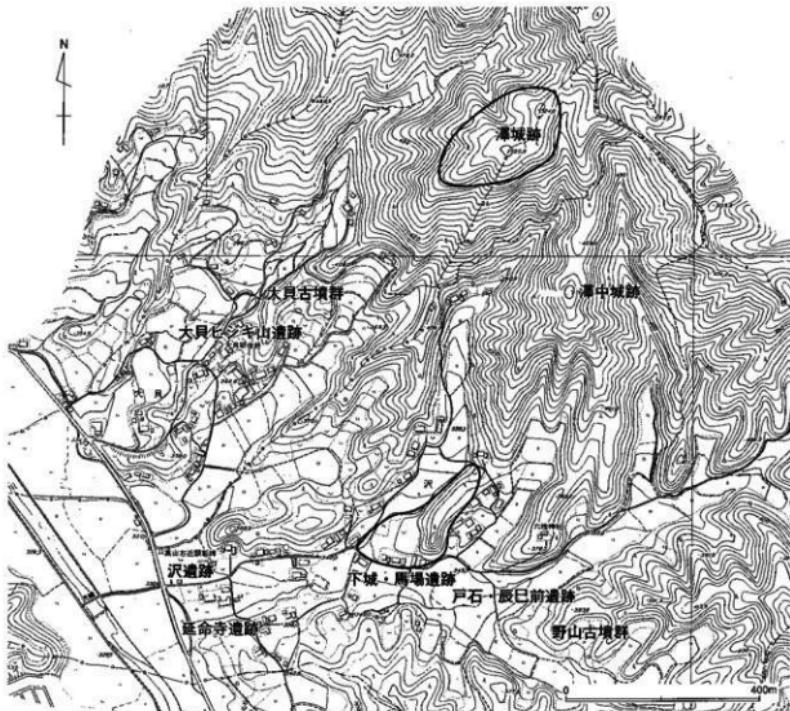
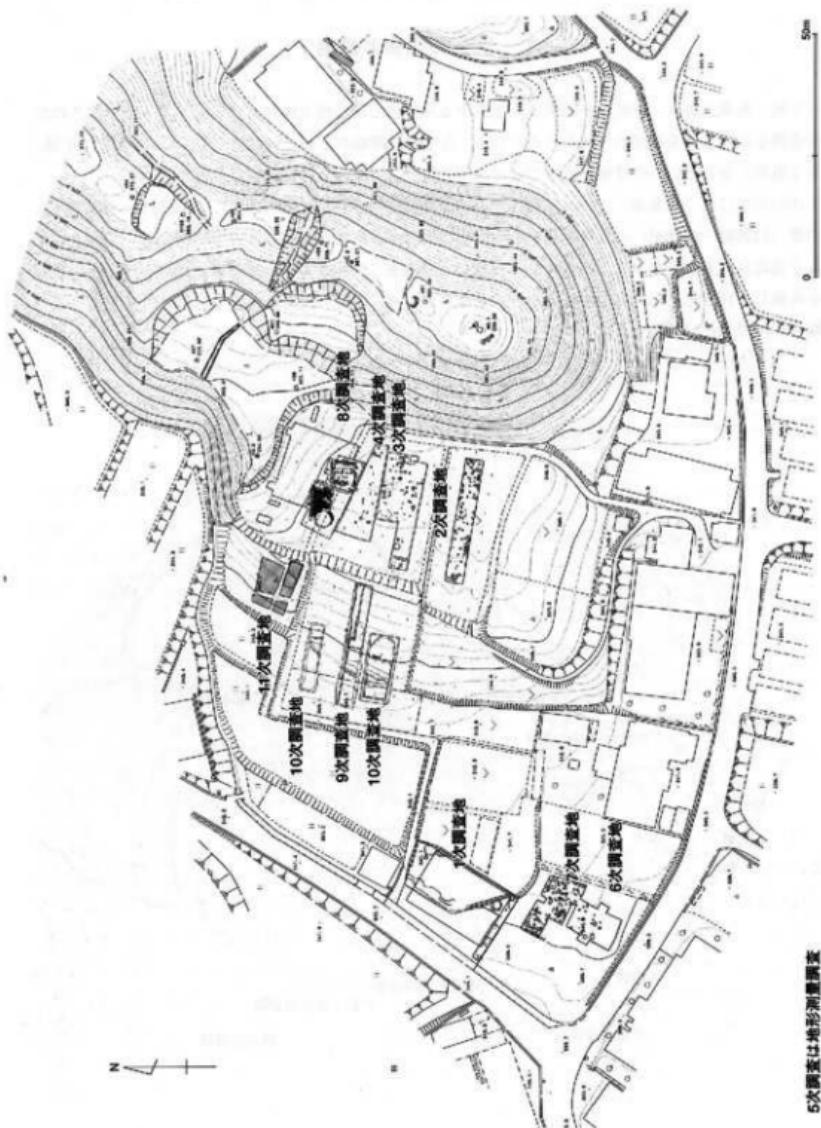


図2 下城・馬場遺跡位置図

图3 下城·馬場遺跡調查位置圖

5次調査地地形測量調查



これらの発掘調査によって、下城・馬場遺跡は、宇陀地域における有力中世武士団のひとりである「澤氏」の城館跡（居館跡）であることが明らかとなつたことから、さらにその状況等を解明することを目的とした範囲確認調査を計画した。1998年度に地形測量等（5次調査）、1999年度には、遺跡南西隅部分の遺構・遺物の状況を明らかにする6次調査を実施し、2000年度には、6次調査地の北隣において7次調査を継続し、あわせて東尾根の地形測量も行った。2001年度・2002年度には、2～4次調査地北側の遺構・遺物の状況を明らかにすることを目的とした確認調査（8次調査）を実施した。2003年以降、個人による農地改良工事に伴う事前の発掘調査を実施（9次・10次調査）しており、本調査地で11次を数える（図3）。発掘調査（現地調査）は、2005年（平成17年）7月21日～2006年（平成18年）3月28日にかけて断続的に行なったが、多くの遺物が出土しているため、平成18年度以降、継続して発掘調査を実施しているところである。2006年度は7月10日～2007年3月30日の間、2007年度は4月17日～2008年3月31日の間、2008年度は4月21日～2009年3月31日、2009年度は4月8日～2010年3月26日までの間、断続的に実施しているが、まだ、多量の遺物が出土しているため、次年度にその調査を継続することとした。

2 位置と環境

下城・馬場遺跡は、尾根稜線から西斜面、標高約339m～370mの一角を占めており、芳野川が流れる西方への眺望が比較的良好で、遠く、宇陀地域の代表的な中世山城である秋山城跡（近世初頭には宇陀松山城）を望むことができる。また、北方には澤城跡や伊那佐山を仰ぎ見ることができる。下城・馬場遺跡の中心は尾根の西斜面に広がり、4段にわたる平坦面が形成されている。遺跡の現状は大半が畠地や水田、山林、周縁部は宅地となっている。

この遺跡の周辺は繩文時代～中世の沢遺跡、弥生時代～中世の延命寺遺跡、古墳時代前期の戸石・辰巳前遺跡や古墳時代前期～後期の野山古墳群などの遺跡が集中している地域でもある（図2）。

3 遺跡の調査

今回の発掘調査では、9次調査時に多くの遺物が出土した9-2トレチの遺物の埋蔵状況を明らかにするため、この調査区を拡張して、11次調査地とした（図3）。

1層（耕作土）、2層（流土等）を除去すると、多量の遺物を含む整地土（3層）を検出した。整地土は、上方から土砂・遺物が交互に傾斜をもって堆積している状況が見える。整地土中の遺物は、少なくとも3回にわたって、上方からの投棄された状況がうかがえる。2006年度は、上面での遺物検出、掘り下げ、遺物取り上げなどを行った。2007年度以降も引き続いて、第3層の掘り下げ、遺物の検出・取り上げ作業等を行っている。遺物の検出・取り上げ作業等はまだ、途上であるが、瓦器類は、12世紀中葉から13世紀後葉の時期のものが大半を占める。

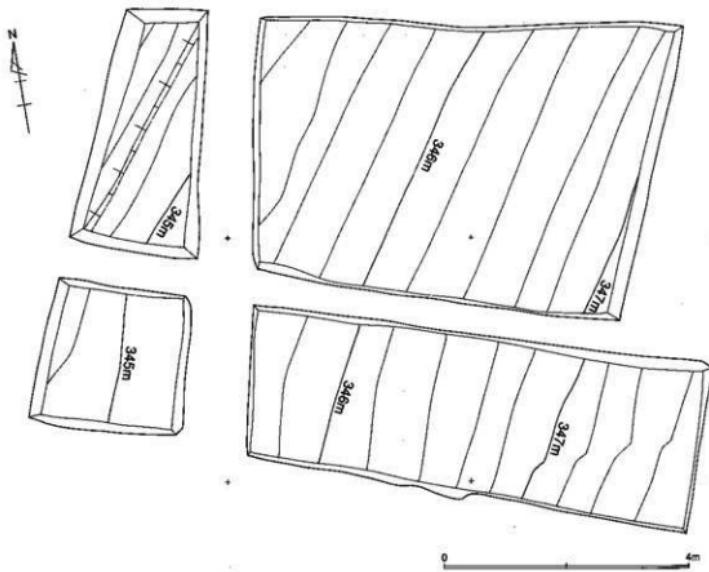


図4 下城・馬場遺跡第3層検出面地形測量図

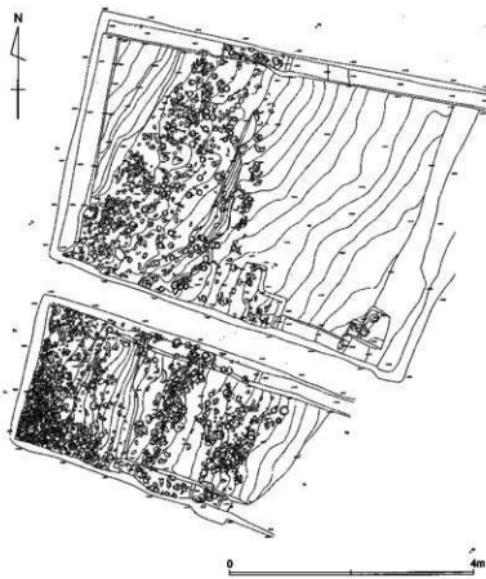


図5 下城・馬場遺跡第3層土器群検出状況測量図（2006年度）

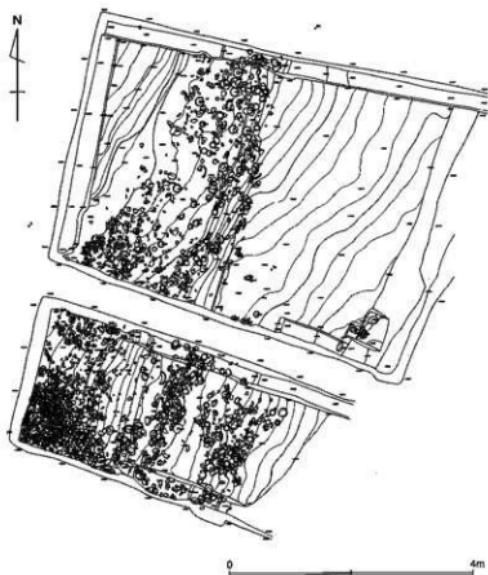


図6 下城・馬場遺跡第3層土器群検出状況測量図（2007年度）

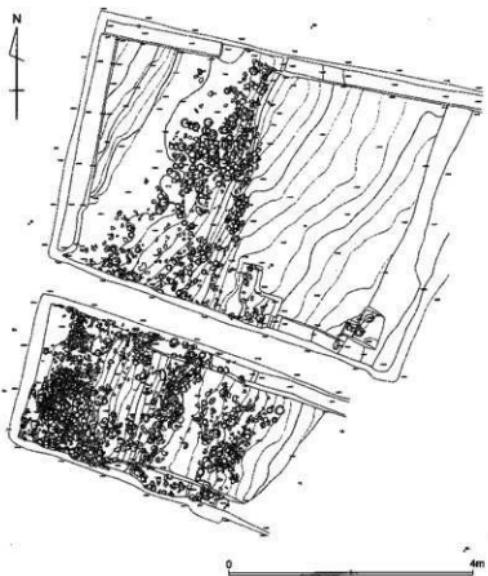


図7 下城・馬場遺跡第3層土器群検出状況測量図（2008年度）

4 まとめ

9・10次調査と同様、上段の居館焼失に伴う片付けによって、土砂、遺物などを西斜面へ投棄した状況がうかがえ、これが結果的に12世紀中葉から13世紀後葉の遺物を含む整地上となっており、地形の傾斜によった斜めの堆積状況を示している。整地作業終了後、館の西側に幅約5～6m、深さ1.5m以上の堀を穿っているが、この堀は、現在の土地形状に比較的一致し、南北方向に埋没しているものと推定される。

なお、堀の造営は、14世紀中葉以降、堀の埋没（埋め立て）は、16世紀後葉頃と現段階では考えている。これが澤氏の居館の終焉とも考えられる。

5 抄 錄

| | | |
|--------|----------------------------------|-----------|
| 遺跡名 | 下城・馬場遺跡（奈良県遺跡地図番号15-D-90） | |
| 調査地 | 奈良県宇陀市株原区沢1295番地（小字名：馬場） | |
| 遺跡立地 | 標高約339m～370mの尾根稜線・斜面、谷部分 | |
| 遺跡規模 | 南北約200m、東西約200m | |
| 種別 | 绳文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺物散布地、中世の居館跡 | |
| 調査主体 | 宇陀市教育委員会 | |
| 調査担当者 | 宇陀市教育委員会 文化財保存課 課長補佐 柳澤一宏 | |
| 調査原因 | 個人の農地改良工事（事業主体：砥出嘉信） | |
| 現地調査期間 | 2009（平成21）年4月8日～2010（平成22）年3月26日 | |
| 調査面積 | 62m ² | |
| 検出遺構 | 整地土 | |
| 出土遺物 | 土師器、瓦器、陶器、磁器、鉄釘、鉄滓他 | （整理箱 12箱） |
| 資料等の保管 | 宇陀市教育委員会 | |
| 調査後の措置 | 次年度へ発掘調査を継続 | |
| 備考 | 平成17年度からの継続調査 | |



写真1 作業風景



写真2 作業風景

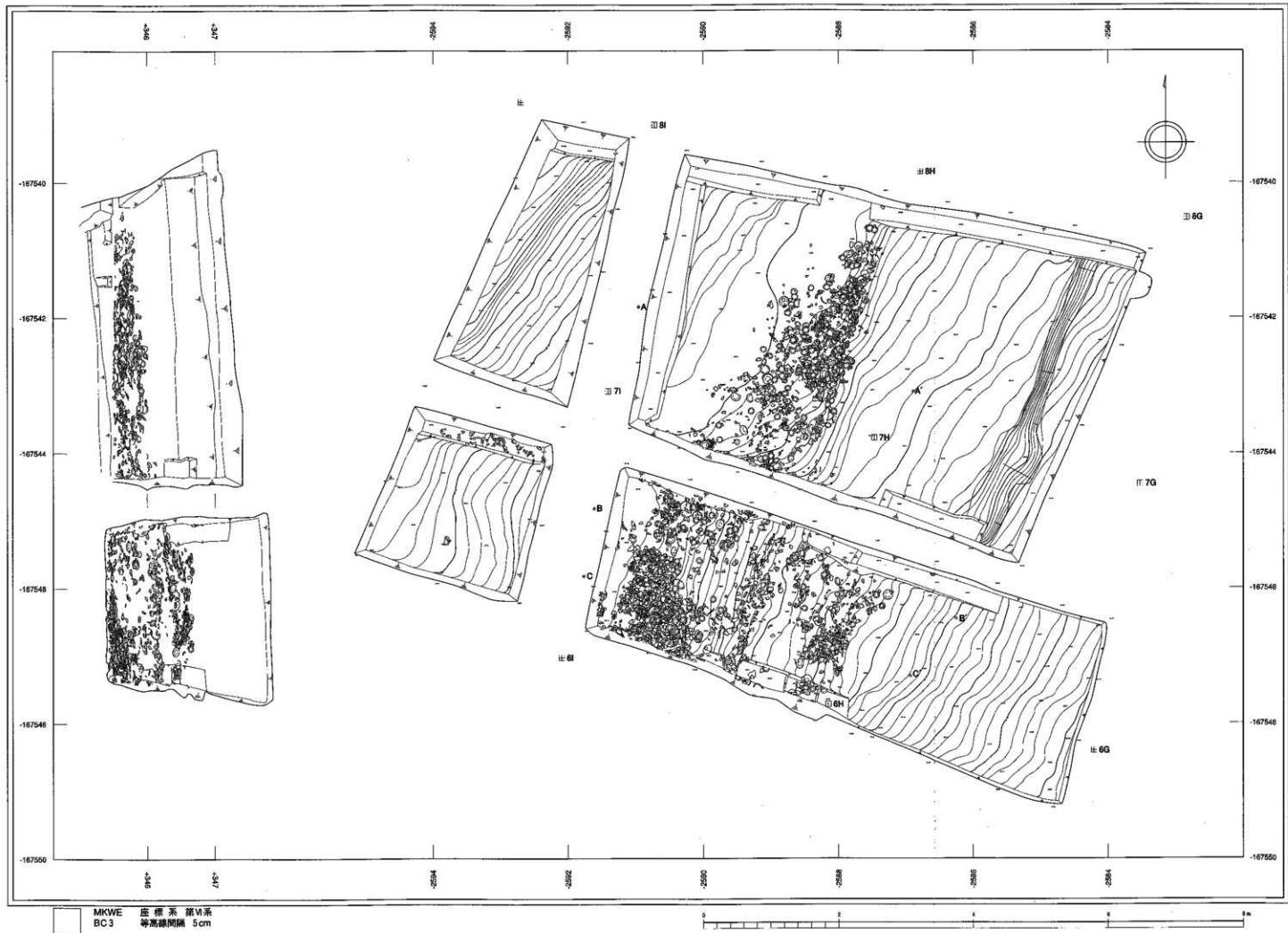


図8 下城・馬場遺跡第3層土器群検出状況測量図（2009年度）

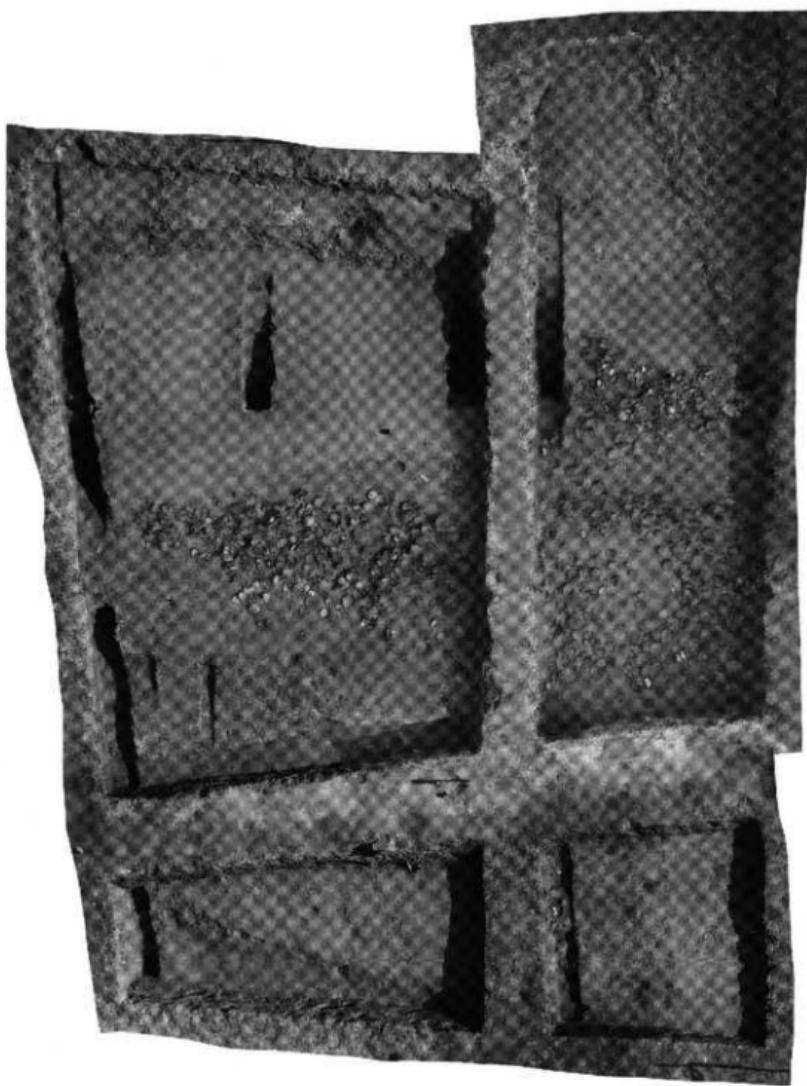
図 版



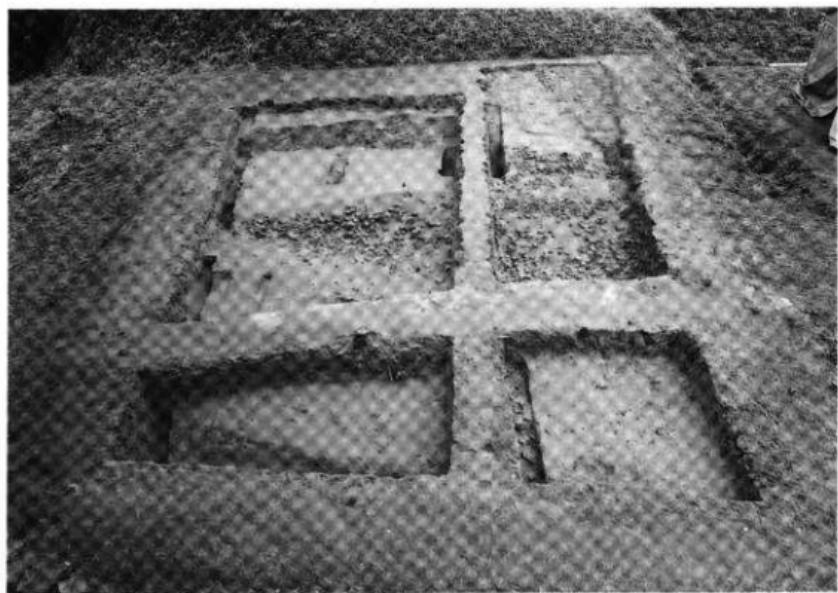
航空写真（南西上空から）



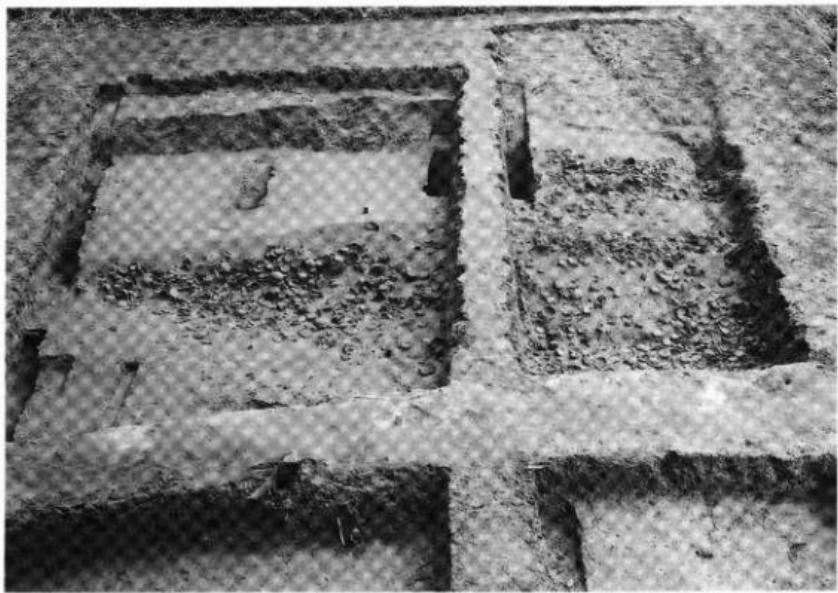
航空写真（西上空から）



遺物出土状況（垂直・モザイク写真）

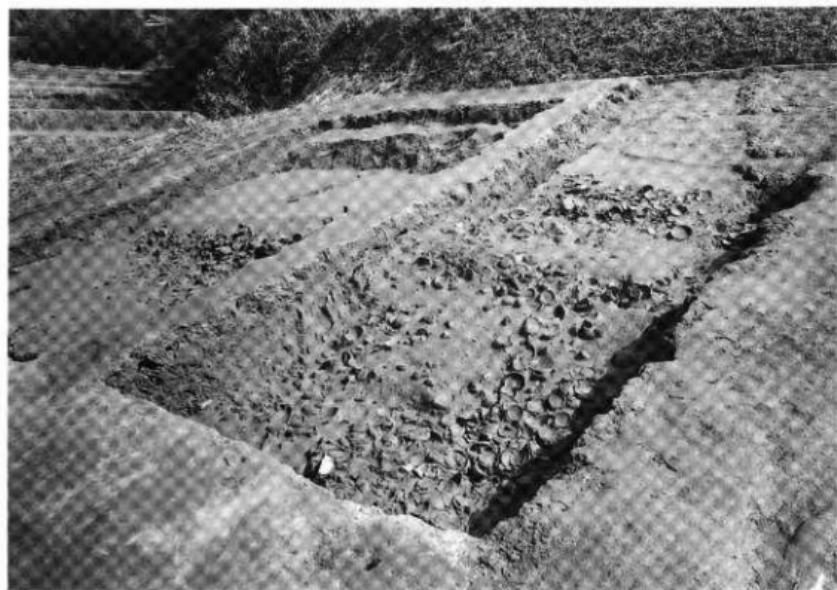


遺物出土状況（西から）



遺物出土状況（西から）

図版四 下城・馬場遺跡



遺物出土状況（南西から）



遺物出土状況（南西から）

報告書抄録

| ふりがな | うだしないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ | | | | | | | |
|--------------------|--|----------------|------|-------------------------|--------------------|----------------------------|---------------------------|--------------|
| 書名 | 宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2009年度 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 宇陀市文化財調査概要 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 6 | | | | | | | |
| 編著者名 | 柳澤一宏 | | | | | | | |
| 編集機関 | 宇陀市教育委員会 文化財保存課 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒633-2164 奈良県宇陀市大字陀拾生1846番地 TEL 0745-87-2274 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2011年3月31日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 ふりがな | 所在 ふりがな | コード | | 世界測地系 | | 調査期間 | 調査面積 (m ²) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | | | |
| 下城・馬場遺跡 (11次調査) | 奈良県宇陀市猿原区 沢1295番地 | 29212-5 | | 34度 29分 33秒 | 135度 58分 07秒 | 2009.4.8 ~ 2010.3.26 | 62 | 個人農地 改良工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 下城・馬場遺跡 (11次調査) | 遺物散布地 城館跡 | 縄文～古墳、中世 中世 | 整地土 | 土師器、瓦器、陶器、 磁器、鉄釘、鉄滓他 | | | | |

宇陀市内遺跡発掘調査概要報告書 2009年度

宇陀市文化財調査概要 6

2011年3月31日 発行

編集 宇陀市教育委員会事務局 文化財保存課
奈良県宇陀市大字陀路1846番地

発行 宇 陀 市 教 育 委 員 会

印刷 共 同 精 版 印 刷 株 式 会 社
奈良市三条大路2丁目2-6